

## 《官場維新記》における言語的特徴について

大島 吉郎

### On the Linguistic Features of *Guanchang Weixin Ji*

OSHIMA Yoshiro

#### 摘要

《官場維新記》于清朝光緒32年(1906)由上海作新出版社出版,是一部清末遣責小説。本稿对该小説进行与太田辰夫“北京官話語言特点”相比较,并指出該小説所包含的一些南方方言成份。

キーワード:《官場維新記》 言語的特徴 清末江淮官話 太田辰夫北京語七大特点

#### 0. はじめに

趙景深 1959によれば、《官場維新記》は光緒32年(1906)に《新党陸官發財記》という書名で上海の作新社より刊行され、《新党發財記》とも簡称されるという<sup>1)</sup>。同書は作者の氏名は記載されておらず、作者不詳のまま佚名著として出版されている。

本小説の主人公袁伯珍は、「数冊の本から得た新知識と、偶然の機会から手に入れた五千元の災害積立金を元手にして、次第に官途に成り上がって数職を兼ねる大官僚となった。彼の一步一步の向上は、すべてがいかげんな維新の上申書のおかげで、そのなかでも漁夫の利を得たもので、それで昇官發財の目的を達したのであった。わずか十六回だけれども、投機的な維新分子、その各方面の活動状況がすべて書き尽くされている。それらの女遊び、アヘン吸引、持ち逃げなど、官界にありがちの怪現状

<sup>1)</sup> 本書の書名が《官場維新記》とされたことについては本編第15回末尾に命名の理由が記されている。

も全部に涉っていて、一部の「維新官場現形記」といえる。」と説明される<sup>2)</sup>。

本書は、清朝末期の1900年代初頭、科挙が廃止され辛亥革命前夜に至る時期の湖北省武漢、江西省から南京、上海に及ぶ長江中下流域一帯を舞台とする全16回の章回小説である。袁伯珍は江西省新喻県の生まれ、30才のころ郷試合格の挙人というエリートであり、袁伯珍に関わる人物は、みなある一定以上の地位にある富裕層であり、留学経験のある知識階級も主要な人物として登場し、小説全体を通して使用される談話モードは、方言（土語）を排除した「江淮官話」であると考えられる。本書での「江淮官話」には方言的要素、文言的要素、北方官話的要素が含まれ、同時期の他の言語資料と比較しても、「江淮官話」の実際は作品及び作者の言語観によりばらつきが見られることは、香坂順一1962bによりすでに指摘されている通りである。

本稿は香坂順一1962b、及び拙稿2020を基に、江淮官話の言語資料であると考えられる《官場維新記》について分析を行い、その言語的特徴の一端を明らかにしようとするものである。原本である作新社版《新党陸官發財記》を参照出来ないため、テキストには中華書局1959年刊《官場維新記》（以下《維新記》と略称）を用いることとする<sup>3)</sup>。同書本文の字体は1959年当時の言語政策を反映して、文字表記の処理が原本に忠実ではないことが繁体字、簡体字の混用から明らかである<sup>4)</sup>。本稿では掲出する例文はすべて簡体字により表記することとする。

## 1. 清代北京官話の特徴との関係

拙稿2020とも比較するために太田辰夫1969を根拠に、清代北京語七大特点との対比を行うことにしたい。

### 1.1 第一人称“咱们”

#### 1.1.1 “咱们”

一人称複数包括義を表す人称代詞“咱们”は2例用いられており、用例からは“京話”（北京官話）として認識されていることが窺える。(01)は外国人を練兵の教官として雇うことになり、外国領事館から“勿克斯”という名の陸軍提督が紹介され、この人物が“京話”を話すことが出来るという設定に基づく発話である。(02)では袁伯珍が従兄の袁仰儕を伴い、便宜を図ってもらいに訪ねて行った“白大爷”は北京在住の有力者として描かれ、いかにも北京人らしく“咱们”を使っている。本書《維新記》の主要な登場人物が“咱们”を使用する場面は見られない。例えば、

<sup>2)</sup> 阿英著、飯塚朗・中野美代子訳（1979:pp.124）から引用。黄立振（1982:pp.593）、また吳邨（1988:pp.243）参照。

<sup>3)</sup> 本書には1956年上海古典文学出版社刊《官場維新記》、1992年民族出版社刊《新党升官發財記》もあるが、いずれも未見。

<sup>4)</sup> 原本である《新党陸官發財記》にどのような「編集」（削除並びに字句の修正）が加えられているか記載が無いため、本書の記述に従わざるを得ない。

(01) 领事官就把现在南京一个曾经任过外国陆军提督名叫勿克斯的，荐与制台。…。这勿克斯因系在中国多年，会说几句京话，所以用不着通事传话。…。勿克斯道：“咱们还是说中国话罢。…”（4回-28頁）

(02) 仰仗见了，连忙迎上去，朝着白大爷作揖道谢。白大爷道：“咱们都是相好，何须如此？”（7-48）

### 1.1.2 “咱”

“咱”も1例用いられているが、対立する相手を含めた包括義を表す用法とは認められない。

(03) 制台大人又道：“…。与其使后生小子去攻那外洋的哲学，还不如把咱中国经史之学，功课定得烦重些，借此可以保全国粹，…”（7-49）

### 1.1.3 “俺”

一人称単数の“俺”は用いられていない。

### 1.1.4 補記：“您”の使用について

二人称単数丁寧語の“您”は用いられていない。

## 1.2 介詞“给”

介詞“给”は3例用いられている。

### 1.2.1 受益の対象を導く用法

受益者を導く用法として次の3例が見られる。いずれも地の文での使用であり、会話文の用例は見られない。共起する動詞が“听”、“看”など聴覚、視覚に関わる感覚動詞であるのは、作者が介詞“给”の使用に慣れていないことに起因するように思われる。(07)は毎月銀貨30圓を寬小姐に渡し、寬小姐がそれを受け取り遣う状況を表す。“给”はお金の授受に関わる実義を担うため、兼語動詞と見なされる。(05)、(06)もモノの授受を伴うため、“给”は介詞と兼語動詞の間に有ると見做すことも出来る。例えば、

(04) 看官若不相信，待编小说的先把官场中一个专讲维新的人，将他生平历史，演说出来，给大众听听。(1-2)

(05) 那胡知县就请他到花厅上相见，先把抚台的札子给他看了，说：“兄弟不过是个五日京兆，不想这些乡民竟撞下这场大祸。(1-3)

(06) 袁伯珍方知曾颂笙现在这里译书局充当东文翻译，…；检出前晚沒有拟完的那个稿子，给他看了，要他删改删改。(3-17)

(07) 所以袁伯珍此番到清江浦，见了丈人之后，那寬大人便把自己已经训饬过女儿的事，先述了一遍；随后劝袁伯珍每月拿出三十块洋钱，给寬小姐使用，说：“夫妻们口角，本是常事。…”（13-88）

### 1.2.2 受け渡しの対象を導く用法

例えば《現代汉语八百詞（増訂本）》（1999:pp.286）に“引进交付、传递的接受者”

と述べられる用例は見られない。

### 1.2.3 “替”

本書において「受益者を導く介詞」は“替”が中心であると言える。例えば、

(08) 那教士见风势不对, 便觑个空儿逃出性命, 连夜打从原路回到江西省城, 去见抚台, 把自己在黄村受辱的情形, 一五一十, 述了一遍, 要抚台替他札飭该管地方官, 勒限缉凶, 按律严办, 并须将抢失的行李, 照数赔偿; 还要叫黄村地方上的百姓, 把打伤的西崽医好, 方肯干休。(1-3)

(09) 所以要请老兄过来, 替兄弟想个方法。(1-4)

(10) 教士说他伤重, 替他素养伤费一千两。(1-5)

(11) 当时辞出县署, 回到家中, 便细细打算, 要把这宗侵蚀下来的银子, 汇到北京托仰侨替他捐个大八成知县, 为下半世吃着不尽之計。(1-6)

「受け渡しの対象を導く用法」についても“替”の用例が見られることから、本書では“替”が“給”の役割を担っているものと考えられる。例えば、

(12) 这一天, 忽然制台差个巡捕到栈房里来, 替他道喜, 说已经把他的名字附入别样保案, …。(3-20)

(13) 袁伯珍道: “我明日替你回朋漕督大人, …。”(8-55)

### 1.2.4 “V 给~”

“给”が動詞に後置して「モノ、コト」の受け手を示す。形式は文言の“V 与~”と一致することが原因として考えられるが、介詞“给”が3例に止まるのに対して、この形式は7例確認することが出来る。例えば、

(14) 仰侨道: “你且坐下, 待我慢慢的说给你听。”(1-7)

(15) 把天累交给周营官, 即于次日, 添派二十名营兵, 帮同护解晋省。(5-33)

(16) 勿克斯道: “你试说给我听听看。”(8-55)

(17) …, 每月只在房捐项下拨给洋银一千元, 若要办那形式上的警察, …。(8-57)

(18) …, 有的欠上了一年半载, 还不发给。(14-98)

(20) …, 一一从行李中检了出来, 交给仰侨。(15-104)

(21) 当时袁伯珍见了宽大人, 就把手上的信递给他看。(15-105)

### 1.2.5 “V 把~”

大島 2020 では“把”が介詞として“给”の意味に用いられていたが、本書《維新記》には動詞に後置する例が1例見られるのみである。例えば、

(22) 那宽大人接了这信, … 我女儿不可一味执拗, 白白的把个诰命夫人让把他人做了。(15-104)

## 1.3 助詞“来着”

近過去の回想を示す助詞“来着”は用いられていない。

## 1.4 語気助詞“呢”

語気助詞“呢”は全14例見られる。

#### 1.4.1 肯定文

全14例中、肯定文での使用は3例に止まり、いずれも“却、才”といった反駁の語気を表す副詞を伴っている。例えば、

(23) 躊躇了半晌，方对胡知县说道：“…，要想設法補还，却有些难处呢。”（1-4）

(24) 袁怕珍听虽毕，低头想了一会，对仰济说道：“…；只是要拟这个条陈，却是个难题目呢！”（2-16）

(25) 宽小姐听见袁伯珍说他禽兽，不觉勃然大怒道：“我倒不是禽兽，…。你才是个禽兽呢！”（12-85）

#### 1.4.2 疑問文

全14例中、11例が疑問文に用いられ、肯定文と同様の傾向として、強い反駁、あるいは反語の語気を伴っている。例えば、

(26) 凭你怎样也改变不过来，有什么用处呢？（1-8）

(27) 倘一旦撞下祸來，真个流了血，断了头，还是算做忠臣，算做孝子呢？（2-10）

(28) 仰济道：“…。然而依着笔墨上做去，又有那一个做得到的呢？”（3-18）

(29) 袁伯珍道：“除却这位王爷，还要拜什么人呢？”（7-47）

#### 1.4.3 省略疑問文

“呢”を省略疑問に用いる用例は見られない。

#### 1.4.4 “哩”

語気助詞“哩”の用例は見られない。

#### 1.5 副詞“别”

「禁止」を表す副詞“别”は1例のみである。用例数は多くないものの、本書の特徴の一端として文言的、あるいは擬古的な禁止副詞を用いる点が指摘できる。

##### 1.5.1 “别”

尾崎實 2007、大島 1996 は北方方言“别”に対して南方方言は“莫”とする。

(30) 显得利道：“据这般说起来，你且别忙，待我写个信到上海银行里去，问一问看，再给你回音。”（14-94）

##### 1.5.2 “莫”

“莫”は1例用いられるに過ぎず、用例からは文言あるいは書面語としての使用であることが分かる。例えば、

(22) 假面欺人，虚言搗鬼，径路终南捷。诸公莫笑，个中半是凉血。（16-111）

##### 1.5.3 “不要”

尾崎實 2007、大島 1996 は北方方言“不要”に対して南方方言は“莫要”とする。

(31) 当时袁伯珍喜出望外，叮嘱他不要把这事告诉程日贤。（4-24）

(32) 时蹈仁笑道：“老兄且等过了中秋以后，不要吝惜小费，…”。（6-41）

(33) 赵邨生听说，便连忙答应道：“是是是，就是依了公祖的说话，不要追究下去。  
(10-71)

#### 1.5.4 “不消”

“不要”、また“不用”の意味でも使用される“不消”は5例用いられる。大島1996、尾崎實2007に“不消”は記載されない。许宝华・宮田一郎(1999:pp.615)は①冀魯官話、②江淮官話、③西南官話、④徽語、⑤吳語、⑥湘語、⑦贛語で使用されると指摘する。例えば、

(34) …；那下等社会的人，更是不消说了。(1-2)

(35) 话说黄道台听了袁伯珍要想回家的说话，不觉哈哈大笑道：“伯翁，你果然无志功名，那便不消说了，…。(5-31)

(36) 槽督大人道：“那是不消说得。…”。(10-69)

(37) 宽小姐道：“这倒不消，…”。(11-78)

(38) 李统领道：“这倒不消过滤，…”。(14-99)

#### 1.5.5 “莫要”

本書に見られる“莫要”2例はいずれも副詞“切”を伴い、強い口調を表す。

(39) 袁伯珍不等他说完，便接开口道：“他们要想保全一半寺产的说话，切莫要说起。…”。(10-71)

(40) 虽然，看小说的，切莫要把这班假维新的人看轻了！（16-110）

#### 1.5.6 文言の禁止副詞

“无须”、“毋须”、“毋庸”など、いずれも文言の副詞が会話文中に使用されている。例えば、

(41) 袁伯珍道：“如此说来，我们横竖总得要进京去当差，那矿务差使，自然上头全改委他人，无须自家辞得的了。”(15-106)

(42) 两边站着的家人见了，高呼送客，胡知县立起身来，一直把袁伯珍送出花厅，口里说道：“请老兄从速把积谷款子，预备起来，毋须再筹别项款子了。”(1-4)

(43) 李统领想了一想道：“…。把中学堂的差使，改委他员，自然一举两得，袁伯珍毋庸兼顾了。”(14-97)

#### 1.6 程度副詞“很”

程度副詞“很”は全36例あり、このうち“很是～”が3例を占める。同じく程度副詞として用いられるものに“好生”、“甚”、“甚是～”、“甚为”などが挙げられる。本書《維新記》の用例を通して見る限り、“很”はすでに江淮官話の中でもある一定の階層に浸透している状況が伺える。

##### 1.6.1 “很” + ～

###### 1.6.1.1 “很” + 形容詞

(44) 谈谈讲讲，晓得曾颂笙是个开通人物，兩下里说得很投机。(2-12)

### 1.6.1.2 “很” + 動詞（+ 賓語）

(45) 袁伯珍初时听了，也很欢喜，既而想到花了这许多银子，…。(3-20)

(46) 制台说：“这倒很合我意。”(4-27)

(47) 袁伯珍这几句话，说得来主爷心下极其中肯，当下很嘉奖了一番，才让袁伯珍退了出来。(7-50)

(48) 那教习在学堂里，…，也很觉得有些雄赳赳的气象。(9-60)

(49) 袁伯珍听了这话，…，想罢，便欠身答道：“大人说的很是，卑府也情愿报效。…”(13-87)

(50) 漕督大人见袁伯珍本来是王爷面上的人，今天又为着自己一人报效了这许多银子，心上很抱不安；…。(13-88)

(51) 制台大人道：“哦，原来袁道就是老兄的东床，这人倒很有才干。(15-105)

### 1.6.1.3 “很” + 助動詞

(52) 袁伯珍屡次所办的事，都合着制台的意，制台很想照应他。(5-34)

(53) 临到上船之时，曾当面对漕督大人说，袁守会很会办事，…。(10-66)

(54) 袁伯珍道：“现在弥陀寺已经改头换面，修做学堂形式，又宽敞，又雅致，很可作为结婚之所。(11-78)

### 1.6.1.4 “很” + “有些”

(55) 袁伯珍见節届中秋，所招的股份，尚无丝毫现银到手，心下很有些着急。(6-41)

### 1.6.1.5 “很” + “不～”

(56) 宽小姐道：“本来是不妨同去的，只是因你到了那里，就免不得要抽鸦片，这件事很不文明，…”。(12-84)

(57) 袁伯珍查点堂中原定的课程，见有兵学、律学等科，又每逢礼拜六这天，须体操一次，意中很不以为然。(13-91)

### 1.6.2 “很是” + ～

(58) 新喻是个小县，没有什么大人物，况兼他家出了一个部曹，所以他这绅士，在地方上很是赫赫有名，…。(1-2)

(59) 这里袁伯珍把他所改的笔墨，细看一遍，觉得很是新鲜，…。(3-17)

(60) 袁伯珍因为在上海看见洋兵的操法，很是整齐，…。(4-27)

(61) 袁伯珍见他相待很是殷勤，…。(8-54)

(62) 那漕督大人虽然于举行新政，很是热心，然而这章程上的字，却认不完。(11-74)

### 1.6.3 “好生”

“好生”は旧白話語彙であつたものが現在の漢語諸方言でも残っていることが知られている<sup>5)</sup>。本書での用例からは共起する他の語彙との関係から、一概に江淮官話の用

<sup>5)</sup> 许宝华·宫田一郎(1999:pp.2319)によれば江淮官話での使用も認められる。白维国(2015:pp.755)は《元曲選·梧桐雨》の例を挙げる。

例とすることは避けるべきであると考え。例えば、

(63) 谁知伯珍乐极生悲, …, 膝下空空, 尚无儿女, 不觉好生伤感。(3-23)

(64) 袁伯珍见漕督大人果然准他试办, 心下好生欢喜, …。(8-58)

(65) 制台大人看了, 好生诧异, …。(15-106)

#### 1.6.4 “甚是”

“很是”と同じく後に二音節語、あるいは成語形式の語を伴い、修辭的形式を整えるために用いられていることが分かる。例えば、

(66) …, 心下也甚是喜欢。(5-35)

(67) …, 一切事情, 都是由仰仗家里的人替他照应, 却甚是井井有架。(6-42)

(68) …, 忽然看见弥陀寺被官府查封, 甚是骇然。(10-69)

(69) 袁伯珍上去禀谢了制台大人, 一面交卸, 一面到差, 倒也甚是忙碌。(14-97)

#### 1.6.5 “怪”

“怪”が程度副詞として用いられる例は見られない。

#### 1.7 形容詞 + “多了”

形容詞の後に置き「ずっと、はるかに」の意を表す<形容詞 + “多了”>は本書に見えない。<形容詞 + 得 + 多>に“了”が添えられた例は1例見える。

(70) 就是地方上的风气, 也比从前开通得多了, …。(6-42)

大島 2020 でも指摘したように、江淮官話の特徴は北京官話<形容詞 + “多了”>に対して< (“比” +) “还要” + 形容詞>に見出すことが出来る。本書《維新記》には2例見える。例えば、

(71) 有时那假的还要胜过真的一等。(1-1)

(72) 因此旧日认识的那些朋友, 又攒了拢来 : 东边请看戏, 西边请吃酒, 比前番到上海时还要热闹。(6-40)

#### 1.8 小結

北京官話と重複する項目は見られるものの特定の語に止まっていることが伺える結果となった。

小稿の記述を太田辰夫 1969、山田忠司 2011、大島 2020 と対比させたのが以下の表である。

5 例以上用例の確認出来るものは○、5 例以下は△、用例の無い項目には×の記号で示すことにする。

太田 1969	《老残游記》 <sup>6)</sup>	《鄰女語》 <sup>7)</sup>	《維新記》
人称代詞 “咱们”	咱们 <sub>1</sub> ×	1) 咱们 <sub>1</sub> ○ 咱们 <sub>2</sub> ○	1) 咱们 <sub>1</sub> ○ 咱们 <sub>2</sub> ×

<sup>6)</sup> 山田忠司 2011 参照。

<sup>7)</sup> 大島 2020 参照。



		2) 咱家 ○	2) 咱家 ×
介詞“给”	1) 受益者 ○ 2) 被害者 × 3) V 给 ○ 4) 被動 ○ 5) “把” = “给” ×	1) 受益者 △ 2) 被害者 × 3) V 给 ○ 4) 被動 △ 5) “把” = “给” ○	1) 受益者 △ 2) 被害者 × 3) V 给 ○ 4) 被動 × 5) “把” = “给” △
助詞“来着”	×	×	×
語気助詞“呢”	1) “呢” ○ 2) “哩” ○	1) “呢” 呢 <sub>1</sub> ○ 呢 <sub>2</sub> ○ 呢 <sub>3</sub> △ 2) “哩” △	1) “呢” 呢 <sub>1</sub> ○ 呢 <sub>2</sub> ○ 呢 <sub>3</sub> × 2) “哩” ×
副詞“别”	○	×	△
程度副詞“很”	1) 很 ○ 2) 怪 ○	1) 很 △ 2) 怪 ×	1) 很 ○ 2) 怪 ×
形容詞+ “多了”	1) …多了 × 2) 比…还要… ○	1) …多了 △ 2) 比…还要… △	1) …多了 × 2) 比…还要… △

## 2. 接尾辞“～子”と“～儿”

### 2.1 “～子”

本書《維新記》から抽出される“～子”形式の語は全57語あり、《現代汉语词典（第七版）》（以下《現漢》と略称）に見出し語として項目の立てられていない語は下線部で示す。括弧内は用例数。

案子(3) / 板子(1) / 鼻子(1) / 辫子(2) / 臣子(1) / 厨子(1) / 单子(3) / 担子(1) / 道子(1) / 底子(1) / 点子(1) / 儿子(1) / 二毛子(1) / 法子(9) / 房子(1) / 稿子(4) / 股子(1) / 骨子(1) / 龟子(1) / 猴子(10) / 胡子(1) / 划子(1) / 幌子(1) / 架子(1) / 金项子(1) / 款子(11) / 老子(1) / 路子(1) / 乱子(3) / 帽子(2) / 男子(4) / 牌子(1) / 坯子(1) / 妻子(6) / 日子(6) / 身子(1) / 狮子(1) / 台子(5) / 堂子(9) / 帖子(8) / 王八羔子(1) / 屋子(3) / 戏子(15-107) / 箱子(1) / 小子(1) / 袖子(1) / 靴页子(1) / 洋鬼子(1) / 样子(1) / 一会子(2) / 椅子(1) / 银子(85) / 院子(3) / 札子(9) / 宅子(3) / 折子(1) / 种子(1)

これらの語を概観すると、現在“普通话”として用いられている語が大多数であるが、例えば“道子”は本書《維新記》では「つて、コネ」の意味で使われており、《現漢》

の記述とは合致しない。“台子”は《現漢》に〈方〉として“桌子”の意と記される。“二毛子”は「西洋人」に対する蔑称で、“洋鬼子”を言い換えた語である。“一会子”は“一会儿”と対を成す。

大島 1996 に基づくと、“单子、底子、儿子、架子、男子、样子”が南方語として記載されている。“些儿”は見えるが“些子”が用いられていない点は、談話モードによる資料性の問題であると考えられる。

## 2.2 “～儿”

接辞として“～儿”を伴う例は 10 語を数えるのみであり、“～子”形式に比べて、その差は顕著である。本書《維新記》の特徴の一つ、あるいは江淮官話の特徴を映し出しているとも考えられる。

巴狗儿 (1) / 独自一个儿 (2) / 瓜子脸儿 (1) / 孩儿 (2) / 话儿 (1) / 空儿 (3) / 双双儿 (1) / 些儿 (3) / 一口儿 (1) / 昨儿 (1)

“巴狗儿”は《現漢》の見出し語では“巴儿狗”とする。“昨儿”は“今儿、明儿”などと共に使用される状況にはなく、本書《維新記》では“今天、明天、昨天”が標準とされていることが推測できる。

《官場維新記》“今天、明天、昨天”の使用状況

今日 7	明日 9	昨日 0
今天 11	明天 11	昨天 4
今儿 0	明儿 0	昨儿 1

## 3. 方言的色彩を帯びた語及び表現について

### 3.1 状態補語“V 得来 + 四字格”

许宝华・宫田一郎 (1999:pp.5589) は“V 得来 + 四字格”の形式について“得来”を見出し語に立て、“〈助〉放在某些动词、形容词及其补语之间，相当于普通话里的结构助词‘得’。吴语。”と記述し、文学作品からは《海上花列传・第十三回》“勿要说～怕人势势”の例を挙げる。本書《維新記》では形容詞の例は見られず、ある何らかの動作、行為について、どのような結果がもたらされたのかを述べる状態補語の形式であると考えられる。本書《維新記》には下記 12 例が用いられており、呉語由来であることがうかがえる。使用される動詞は“打／換／生／说／踏／吓”の中でも“说、吓”の例が多い。香坂順一 (1962b:pp.75) は“～得来”は“～得很”“～得很”に近いものと考えてよいであろう。」と述べる。

- (73) 吓得来手足无措 (1-3)  
 (74) 生得来十分可爱 (3-23)  
 (75) 说得来娓娓动听 (4-26)  
 (76) 换得来簇簇一新 (4-29)  
 (77) 吓得来魂飞魄散 (5-32)  
 (78) 说得来津津有味 (6-38)  
 (79) 踏得来如牛耕一般 (6-43)  
 (80) 打得来遍体重伤 (7-44)  
 (81) 说得来主爷心下极其中肯 (7-50)  
 (82) 说得来入情入理 (8-58)  
 (83) 吓得来胆战心惊 (9-58)  
 (84) 说得来意荡神迷 (9-61)

### 3.2 介詞“跟、和、同”

本書《維新記》に“跟”が介詞としての用例は1例に止まるのに対し、“和”は40例を数えることから、大島1996が記述する“跟—和”の南北での対立状況を反映していると見てよいであろう。介詞としての“跟着”は見られず、“跟了”（1例）“同”（2例）“同了”（2例）が用いられている。

(85) 仰倂道：“你既然有这许多银子，只要跟我到湖北去走一遭，我自然有个方法，教你做官，可以不用捐得的。”(2-14)

(86) 袁伯珍听了这话，…；但是我既然跟了他吃饭，…。(13-87)

(87) 袁伯珍果然连夜把条陈写好，又同仰倂细细读了一遍，道：“…，这便如何是好？”(3-18)

(88) 大众在弥陀寺等了一会，只见袁伯珍已同了宽小姐双双来到。(11-78)

### 3.3 助動詞“要想、想要”

大島1996に南北の対立として助動詞“要—想”の記載は見られるが、“要”と“想”が複合した“要想—想要”についての項目は立てられていない。本書《維新記》並びに《鄰女語》における“要想—想要”の分布からは顕著な差異が見られる。例えば、

《鄰女語》・《官場維新記》“要想、想要”の使用状況

	要想	想要
1903《鄰女語》	13	1
1906《維新記》	35	2

(89) 袁伯珍听说，触起从前要想做官的念头，就把自己也要打算捐官出去的意思，

告诉了仰仗，请仰仗替他筹画。(2-14)

(90) 袁伯珍问明了他的来踪去迹，才晓得他也是维新一派的人，正想要再问他东洋游学的情形，只听得家人高声叫道：“大老爷来了！”(2-11)

### 3.4 “趁船”

本書《維新記》で“趁船”は“乗船”と同義で並行して用いられている。例えば、

(91) 即便带着家人起程，由襄河趁船到襄阳府，再改由旱道。(5-35)

(92) 到了第四天上，…，趁了长江轮船，换了小火轮，放到清江浦。(8-53)

(93) 一路上经过临江府、南昌府，到了湖口，换乘了小火轮，…。(2-14)

许宝华・宮田一郎(1999:pp.5962)は“〈动〉乘坐(车、船等)。吴语。”と述べる。“趁”と“乘”の全般的併用は、著者の音韻的感觉の一部、前鼻音と奥鼻音対立の崩れの一端と捉えることが出来る。

### 3.5 “VV + 結果补语”

これまで言語資料の性質、性格について言及する際、注意を払われることが希薄であった“VV + 結果补语”は、南京方言、呉方言、閩方言、粵方言で使用されることが報告されている<sup>8)</sup>。本書《維新記》の動詞重畳型にこの用例は見えないものの、江淮官話と南京方言、呉方言の関係、言語資料としての性質を見極める上で重要な指標となることが考えられる。

## 4. おわりに

香坂順一 1962b は、清末における下江(江淮)官話の言語資料として《六月霜》、《負曝閑談》、《鄰女語》、《苦社会》、《官場維新記》の五種類を挙げ、下江官話の性質について論じている<sup>9)</sup>。清朝末期において、政治、外交の場において果たされる北京官話の役割に対して、経済、流通の動脈上に広がる江淮官話、あるいは広く南方官話が情報、メディアに対して担った影響も決して小さいものではなかった<sup>10)</sup>。香坂論文の目的は、北京官話と江淮官話双方がどのように語彙、語法の面で影響を与え合い、今日の“普通話”が成立しているかを探るためにも個別の資料を分析、調査する必要があると考えたものである。本稿は香坂順一 1962b、1963 の成果を踏まえ、太田辰夫 1969 を基準に《官場維新記》の言語的特徴を見出そうとしたものである。大島 2020 では記述出来なかった方言的要素の一端を明らかにすることで、分析、調査の方向性を広げ、今後は《六月霜》、《負曝閑談》、《苦社会》の言語的特徴を明らかにして行きたいと考

<sup>8)</sup> 李文浩(2009:pp.36)、刘 順・潘文(2008:pp.47)、汪国胜・付欣晴(2013:pp.24) 参照。李文浩(2009:pp.41) は更に“VVR”の型式が徐々に“普通話”に浸透しつつある状況を指摘する。

<sup>9)</sup> 香坂 1963 はこれら五点の資料の中から《六月霜》、《鄰女語》、《官場維新記》の語彙索引を編むために語としての動詞をどう規定するかを論じたものであり、香坂 1962b と連続性を有している。

<sup>10)</sup> 増田渉(1963:415)によれば刊行された清末小説は1,000種を下らないという。その多くがメディア都市上海で出版されていることを考慮する必要があるであろう。

える。

## 引用書目

《官場維新記》、中華書局上海編輯所編輯、1959年、中華書局。

《鄰女語》、憂患余生著、1957年、上海文化出版社。

《現代漢語八百詞（增訂本）》、呂叔湘主編、1999年、商務印書館。

《現代漢語詞典（第七版）》、中國社會科學院語言研究所詞典編纂室編、2016年、商務印書館。

## 参考文献

阿英著、飯塚朗・中野美代子訳 1979 『晚清小説史』、平凡社東洋文庫 349。

大島吉郎 1996 「『官話類編』方言詞索引」、近代漢語研究会 『近代漢語研究資料・索引四種—『大唐三藏取經詩話』『宣和遺事』『紅樓夢（第一回）』『官話類編』—』所収（pp.1-52）。

———2020 「『鄰女語』における言語的特徴について—太田辰夫北京語七大特点説及び“～子、～兒”を中心に」、大東文化大学大学院『外国語学研究』第22号（pp.1-7）。

太田辰夫 1964 「北京語の文法特点」、久重福三郎先生坂本一郎先生還曆記念中國研究』（『中国語文論集 語学雜劇篇』汲古書院 1995、pp.243-265）所収。

———1969 「近代漢語」、光生館『中国語学新辞典』所収（pp.186-187）。

尾崎實 2007 「『官話類編』所収方言詞対照表」、好文出版 2007 『尾崎實中国語学論集』所収（pp.351-388）。

香坂順一 1962a 「清末小説目略」、清末文学言語研究会『清末文学言語研究会会報』第1号（p.33-38）。

———1962b 「下江官話の性格（一）——語彙の面から見た」、清末文学言語研究会『清末文学言語研究会会報』第2号（pp.60-80）。

———1963 「清末の単音動詞——その認定の試み」、清末文学言語研究会『清末文学言語研究会会報』第3号（pp.47-89）。

———1965 「清末文学」、光生館『中国語と中国文化』所収（pp.45-46）。

———1983 『白話語彙の研究』、光生館。

鈴木直治 1963 「比較に用いられる「還要」について—清末における一種の二音節語として」、清末文学言語研究会『清末文学言語研究会会報』第3号（pp.25-38）。

西山美知江 1995 「『商界現形記』の言語」、白帝社『中国語研究』（pp.86-97）。

増田渉 1963 「清末小説」、平凡社『清末・五四前夜集 中国現代文学選集』所収（pp.413-436）。

山田忠司 2011 「關於『老殘遊記』語言特徵的報告」、遠藤光暁・朴在淵・竹越美奈子編『清代民国漢語研究』、韓國學古房所収（pp.169-175）。

白維國主編 2015 《近代漢語詞典（全四卷）》、上海教育出版社。

陳東海 2007 从《新黨升官發財記》看晚清章回小說的敘事特點、《九江學院學報（哲學社會科學版）》第2期（pp.78-80）。

黃立振 1982 《八百種古典文學著作介紹》、中州書畫社。

姜晓红 1999 论现代汉语比较句中的“要”字、华东师范大学出版社《对外汉语教学论丛》所收 (pp.47-54)。

李文浩 2009 “动叠+补”结构及其相关问题的历时考察、《汉语学习》第1期 (pp.36-43)。

刘丹青 1995 《南京方言词典》、江苏教育出版社。

刘顺 2013 论南京方言的 VVR 动补结构形式、世界图书出版广东有限公司《国际汉语教育背景下的汉语研究与教学》(pp.108-116)。

刘顺·潘文 2008 南京方言的 VVR 动补结构、《方言》第1期 (pp.47-51)。

孟繁杰·李焱 2022 从满汉合璧文献看语气词“啊、吧、吗、呢”的出现时间、《古汉语研究》第3期 (pp.24-37)。

汪国胜·付欣晴 2013 汉语方言的“动词重叠式+补语”结构、《汉语学报》第4期 (pp.28-34)。

吳邨 1988 《二百種中國通俗小说述要》、中華書局（香港）有限公司。

许宝华·宫田一郎主编 1999 《汉语方言大辞典（全五卷）》、中华书店。

趙景深 1959 《官場維新記》序、中華書局《官場維新記》(pp.2-4)。